IS(インフィニット・ストラトス)　～何というチート人生～

メフィスン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（インフィニット・ストラトス）～何というチート人生～

【Ｎコード】
Ｎ２１８８Ｚ

【作者名】
メフィスン

【あらすじ】
俺の名前は久遠　龍二。目を覚ますとそこは見知らぬ場所だったんだ。しかもいきなり神様が現れて……俺の人生どうなるの！？※この小説はオリ主が一夏ラウ‥ァーズのキャラとイチャイチャする、そんな話です。あと、オリ主はチートです。それは断言できます。

始まりは突然（前書き）

あの……すいません！もう片方が全く書けていないのに新作始めちゃって……

けど、頑張って行きますので……よろしくお願いします！

始まりは突然

「……ここ、何処だ？」

目が覚めると全く知らない場所に居ました。いや、俺はこんなところに来た覚えは無い。そうこう考えていたら、

「おぉ、目が覚めたか」

「うおっ！？だ、誰だよ！」

目の前に変なじいさんが現れた。いや、何だよこれ！夢か、夢なんだよな！

「違うぞ、夢ではない……儂はお主らから神と崇められとる者じゃ」

「はぁ？か、神が何で俺の目の前に居るんだ？……ってか心読むな！」

「おお、すまんすまん。しかしな、急ぎの用があるんじゃ」

「俺も学校があるんだよ！早くしてくれ！」

そう、俺は高校生なんだ。だから早くしないと学校に遅れる！

「あぁ、その話なんじゃが……お主、行かんでいいぞ。というか、行けん」

「……はい？」

突然何だよ！自称神が現れたかと思うと学校に行けないって……どういうこと？

「すまんな、儂らのミスでお主を死なせてしまったのじゃ」
「何！？つーか、お前らの責任かぁ！！」
いきなり死の宣告来ました。って何で死んだんだっけ？……あぁ、そういや通り魔に刺されたんだっけ……

「すまんっと言ってるであろう。だから責任を取って転生させてやる。ただし、元の世界は無理じゃぞ？」
「……転生？それって、小説の世界とかも行けるのか？」
「儂の手にかかれば何処でも行けるわい！」
いや、胸を張られても……ってか、それなら……戦争とかは無しだな。すぐ殺されちまうもんな。

「それなら問題無い！お詫びにお主の願いをいくつか聞いてやる」
「それマジか！？」
なんか話がいい方向に？まぁいいか。

「それでは、戦争が起こっている世界でいいのか？」
「いやいやいや！そんな事無いですよ！」
「……変わり身が早いの。それじゃあ、何処がいいのじゃ？」
うーん……仮面ライダー好きだったからなぁ、そこでもいいけど……ここはあえて、

「ＩＳの世界でお願いします！」
「ＩＳ……？はて、どんな世界じゃったか……」
「えっと、インフィニット・ストラトス……だったような」

「あぁ、あれか。分かった……それでお主の願いは？」

ふっふっふっ、これで俺はハーレムの中に……

「とりあえず、男のまま転生がいいです」

「了解した。……っという事は、ＩＳに乗る才能もいるな？」

「はい！お願いします！」

「いいんじゃ、儂の責任だからな……後は何がいいかの？」

「えっと、素手でＩＳと戦える身体能力は……いけますかね？」

「むむっ、何故そんな能力が……あぁ、なるほどな……分かった」

俺の心を読んだが、俺も良く考えて無かったんだが……まぁ、いいか。

「それで、後は何かあるかな？」

「ええっと……専用機が欲しいんですけど」

「任せぃ！儂の手にかかれば最強の専用機を用意してやる！」

ん……？急に張り切ったぞ、そういうの得意なのか？

「あぁそうなんじゃよ♪儂はそういうの作るの大好きなんじゃ♪それでどういうのがいいのじゃ？」

また心読んでる……

「えっとですね……平成仮面ライダーに変形できるＩＳがいいんですけど……」

「なぬ？……それは、何だ、あの……サブライダーもなのか？」

目を光らせてこっちを見ないで欲しい。

「えっと、出来たらそうして欲しいなぁって……」
「任せぃ！それくらい無いとつまらん！それで、カブトとかなのじゃが……どうすればいいんじゃ？」
「どうすれば、というと？」
「ベルトに装着されたまま、か……原作通り自律稼動させるのか……なのじゃが」
「もちろん、後者で！えっと、よろしければ、キバとかもそれでいけるでしょうか？」
「むむっ、任せよ！……久しぶりに楽しめそうじゃ……（ボソッ」
ん？今楽しめそうとかなんとか……

「おっと、話がずれたの……それじゃぁ、お主が目覚めたら……そうだな、ＩＳ学園入学１週間前のあたりになっておる」
「あ、ありがとうございます」
「いいんじゃ、気にするな。……それとだな、お主は篠ノ之　束と生活しとるようになっておる」
「……はい？」
「あのじゃな、お主は篠ノ之　束と共に生活をしとるという事になっとる。そうすれば、専用機持っとる理由にもなるじゃろ？」
あぁ、なるほどなぁ……だけどあの人かぁ……

「まぁ、気にするな。チート、というんじゃったか？そんな機体を持てるのじゃからな」
「ま、まぁそうですが……」
「よし、そうとなれば出発じゃ。ＩＳは後から送るからの！」
そう神が言うと、俺の意識が遠ざかっていった。

始まりは突然（後書き）

感想、批判などございましたら、感想にお書きください。

オリジナル主人公&ＩＳ設定

名前…久遠　龍二（くどう　りゅうじ）
年齢…１５歳
身長…１６９ｃｍ
体重…６８ｋｇ
容姿…黒髪で肩まで伸ばしている。目は両方とも黒。だが、電王を使用している場合はそのフォームに合わせた色になる。
性格…周りをよく笑わせる陽気な性格。だが、試合などには真剣に取り組む。
備考…篠ノ乃　束とは共に暮らしていたため、仲が良い。また、ＩＳ学園に来るまでは、束の研究を手伝っていたため、ＩＳの知識は大体頭の中に入っている。

ＩＳの設定

ＩＳ名…オールドライバー

能力…平成の仮面ライダー全てに変形をすることができる。また、タツロットや、カブトゼクターなどは、龍二の意思で呼び出せる。キバットバット三世は常に龍二の側に飛んでおり、クラス全員が存在を知っている。また、戦闘にアドバイスをしてくれる、オペレーターの役割も果たしている。
また、飛ぶ事は基本出来ない。
待機形態は、腕時計型のディケイドライバー。

オリジナル主人公&IS設定（後書き）

……原作を知らないバカですが、頑張ります……

束さん登場と黒歴史とＩＳ学園入学

「……ん……うくん……りゅーくん！」
「ん……ここ、は……？」

誰かが俺の名前を呼んでいる気がした、っていうか絶対呼んでいたのだが、ここがどこなのか分からん。

「りゅーくん♪やっと起きたんだね♪」
「……束さん…？」
「そうだよ～♪おはよう、りゅーくん！」
名前を呼んでいる方を向くと……篠ノ乃束が立っていた。そして俺が起きたのに気づくと抱きついてきた。嬉しいんだけど……息が、息が！

「おい束、龍二が苦しそうにしてるぞ？」
「え？って、あー！りゅーくん大丈夫かい！？」
「いち、おう…？」

誰かが注意してくれたみたいなんだが……あの声どっかで聞いたような……
あ～そんなことより空気うめ～！

「りゅーくん、朝ご飯だからね♪早く降りてこないと束さんが全部食べちゃうぞ♪」

そう言って部屋から出ていく束……さん。一応年下だしなぁ、『さん』付けはしないとね！

「おい龍二！聞こえてるか？」
「ん、あぁ……ってキバット！？」
声のした方を向くと、キバットバット三世が飛んでいた。いやいや、おかしいだろ！？っていうか……
「ここって何処なんだ？」
「神の説明聞いてなかったのか？さっきの奴、篠ノ乃束の家だ。っても、即席だけどな」
「ってか、お前は何なんだ？ＩＳは後で届くって……」
そう、神は後で届くと言っていた。だけど、キバットがいりゃ変身出来るぞ！？
「あぁ、その事だが……」
「りゅーくん早くぅ～！」
「……後で聞く」
下から束さんが俺を呼んでいる。確かに腹減ったな……
「まずは腹ごしらえ、ってか？」
「はは、わかってんなら行こうぜ！」
キバットを連れて、部屋を出る。下に行くって言っても……どの階段だ？
適当に行きゃ分かるだろ……これでいいや。
「おぉ、りゅーくん流石だねぇ、束さんの居場所が分かるなんて～♪」
「いや……適当っすよ……」
「だな、近くの階段を適当に選んでたもんな～！」
「お前、ちょ！」

キバットがいらない事を言いやがった……

「ありゃ、そうなの？束さん残念だねぇ…ま、いいや。早くご飯食べちゃおう♪」

「あ、はい！」

そんでテーブル見たんだが……え、何コレ？テーブルに並んでたのは、和、洋、中三食がそれぞれ並んでいた。ってか朝からヘビーすぎる……唐揚げとか、スパゲッティとか……

「早く食べてね！束さんこの後用事があるから♪」

「用事、ですか？」

「そうだよ。それもりゅーくんに関係してる、大切な用事だよ？言わなかったっけ？」

何だろう……俺に関する用事……？

聞いた方が早いよな……面倒くさいけど、聞くか……お、唐揚げ美味しい！

「あの、束さん？用事って何ですか？」

「えっとねぇ、りゅーくんがＩＳ使えるよーって、世界に教えるの！」

「「……はい？」」

束さんの言ったことに、キバットと俺が気の抜けた返事をする。え？まだ誰も知らなかったの？……まぁ、いいんじゃない？

「それで、どうやって教えるんですか？」

「もっちろん、ＴＶだよ♪」

「……えっと、もしかして……」

当たりたくない予想が頭に浮かんでしまった……

「うん、テレビ局全部ジャックして、会見をするんだ♪あ、もちろん、キッくんもだよ♪」

「はぁぁぁぁぁ！？」

「あっはは……って俺も出るのかよ！？」

予想的中……上がり症の俺にそれはきついんだが……っというか、キバット出していいのか？っと聞いてみると、

「何とかなるよ♪」

何ともならねぇぇぇぇ！！

酷いなぁ、犠牲が増えたぞ……

まぁ、いいか。一人より、二人の方がいいしな……

～～～～～～

今はＩＳ学園の入学式だ。前では校長が何か言ってるが、興味ない。

え？会見はどうなったって？……聞かないでくれ。思いだしたくも無い……あの悪夢だけは……

そんなこんなでＩＳ学園に入る事となった俺だが……　居たよ、あいつが。

そう、もう一人男でＩＳを起動出来る男、織斑一夏だ。

って言うか、真横だからね！？わからない方がおかしいよ！？あっ

ちは気付いて無さそうだし……あぁ、キバットは念のためカバンに入ってもらった。だって、喋られても困るし……

『おい！お前、早く出せっての！』
『おいおい、個人秘匿通信（プライベートチャネル）で話すことか？つーか、今入学式…分かるか？』
『……ま、まぁ分かるけどよぉ！』

うるさいな、キバットは。つーかダメだろ、確かに会見の時、俺と一緒に出てたけど……ちなみにベルトだけ部分展開してるんだ。ディエンドだからデザインが……まぁ、大丈夫だろ。
おっと、そんな事を考えてると話が終わったようだ。教室に早く行きたい……あ、行けるのか。

東さん登場と黒歴史とＩＳ学園入学（後書き）

えっと……こっちの方が人気みたいなので、とりあえず更新。

Kの暴走／話は全く進まない（前書き）

タイトル通りです……ｏｒｚ

Kの暴走／話は全く進まない

「はぁ…」

皆さんの視線が…凄い！一夏はこれに耐えてたのか…俺、無理かも…けど、せっかく転生させてもらったんだし、頑張らねば！目の前の一夏も頑張ってる…って、前の席一夏かよ！

「皆さん入学おめでとう、私は副担任の山田麻耶です！」

…沈黙。いやー、視線が本当凄い！背中痛いよー…なんつって。先生困ってるし…いやけど、後ろからも視線凄いし…横からも…死ねるな。うん。

『また死ぬのか～？』

『ちょ、キバット！…あ、そういや…かばんから出してやろうか？』

なんてふざけてみるか。今出したらそっちに集中するだろ。…頑張って逃げろよ？先生が話をしているが、まぁ寮がどうこうって話だろ…気にしない～！

『いいのか！？ラッキー！』

『…はい？皆の注目がお前に来るぞ？』

『そんなこと気にするかよ～♪早くしろって！』

…アホだ、こいつ。まぁ、仕方ないから出してやるか。ばれないようにこそ～っと…

うおっと…自己紹介の時間か？一夏～呼ばれてるぞ～？そんなこと言わないけど。

「織斑君！織斑一夏君！」
「は、はい！」
お～お～、慌ててるな。っと…キバットの発射準備完了！存分に暴れろ！
『おいキバット！いまなら出てよし！』
『よっしゃぁ！行くぜ～！』
「げぇ、関羽！？」
「誰が三国志の英雄だ、馬鹿者」
あ、やべっ！キバット行っちゃだめぇ！
「はっは～！外だ！久しぶりの外だ～！」
「「「はぁ！？」」」
「何だ、こいつは？」
あ～、千冬さんだめ～！俺のキバットがぁ！そう思うと後は早い。急いで俺はキバットを掴み、机の中に放り込む。少し痛いかもしれないけど、死ぬよりはましだ！
「おい久遠、今のはなんだ？」
「あ～…俺のパートナー、みたいなのですよ…」
千冬さんの目つき怖すぎる…っつーか間違っては無い…はずだ。パートナーだしなぁ。
「そうか…以後気をつけろ」

「えっと…何にですか？」
「周りを見ろ」
ういーっす…うおっ！何そのきらきらした目！？まさかキバットのせい！？…やっちまった…
「なるべく、カバンに入れときます…」
「それでいい。次はお前の自己紹介だ、早くしろ」
あっれ～？優しいな？…まぁ、いいか。とりあえず自己紹介！関羽に叩かれたくないし、
「何か変なことを考えていないか？」
「い、いえ！何も！！」
「なら早く自己紹介をしろ！」
怒った！？理不尽すぎるだろ…まぁいいや、キバットも出してっと…
「えっと…俺の名前は久遠龍二です。それでこいつが相棒の…」
「キバットバット三世だ！よろしくな！」
「「「…」」」
ちょっ！何この沈黙！？まぁいいや、座ろっと…
「ふん、まぁいいだろう。この前のあれでお前を知らん奴のほうが少ないだろう」
千冬さ～ん！？思い出したくないんですけど！？それとクラスの皆も納得した表情やめて！
そんなこと考えてると、チャイムが鳴った。はふぅ、やっと開放さ

れる……

Kの暴走／話は全く進まない（後書き）

感想お待ちしてまーす……

一・夏・鈍・感

「なぁ、お前確か……久遠龍二だっけ？」
「あぁ、そうだぜ？織斑一夏。…束さんから話は聞いている……」
そんでもって休み時間に入ってボーッとしたかったのだが……一夏に話しかけられた。めんどくさいけど、ここで無視すると印象悪くなるしな……周りからだけどね！別に一夏に好かれても困るし……
「え！？お前って束さんと仲良いのか！？」
「えっと……あぁ、そうだぜ？束さんに連れられて世界を飛び回ってたんだ……」
「それは……何とも言えないな…」
おまっ、その哀れみを込めた目で見るなぁぁぁ！キバットは俺の肩に乗ってるしよう……ううっ、酷すぎる…あ、一応転生するときにはそんな記憶なかったんだが、キバットが教えてくれた。何で知ってるのか気になったが聞かなかった……めんどいもん♪
「ええ！？龍二君ってあの篠ノ乃博士と知り合いなの！？」
あぁ、声デケー……こっちまで聞こえてるっつの他にも色々言ってるし……あれ？そういや箒…いましたねぇ、一夏の後ろにねぇ、こっちすっごく睨んでますよー？恐い恐い……
「あの……一夏って呼んでいいか？」
「おぅ、俺も龍二って呼ばせてもらうぜ？」
「了解。んで、後ろ振り返ってみな？一夏」
「ん？……って箒！？」

「やっと気づいたか馬鹿者！」
「あぁ、君が篠ノ乃箒さん？束さんから話は聞いてるよ？」
「何！？姉さんから……」
いや、知ってるけどね！？一応初対面だし……まーたー目ーつーきーがー恐いー！束さんの話題は止めよう。うん、俺の命がもたないや。
「あぁ、俺の事は気にしないで？一夏に用があったんでしょ？篠ノ乃さん」
「え？あ、あぁ……話がある、ついてこい」
「え、いいけどよ……チャイム鳴るぜ？」
あ、本当だ。俺のせいか？……そうだな、俺のせいだ。ってか、これってさぁ……原作崩壊したね、うん。
「次の休み時間にしたらどうですかい？篠ノ乃さん」
「え？あ、あぁ……そうしろ！一夏！」
「わ、分かったよ……」
何かアドバイスをしてみる。あ、箒がこっち見たな……一応笑っておこう……ただの変態に見えるだろうけど！
「（な、何なのだあいつは！いきなり笑いかけてきて！……でも、助かったから一応礼を言っとかねばな。）久遠、ありがとう。私の事は箒と呼んでも良いぞ？」
あれ、意外と好感触！？ま、まぁ、あちらから言ってきたんだし……

「いや、いいよ。俺は箒さんの恋が実るよう応援してるだけだよ？」
「な、なななななっ！！」
「どうしたんだ箒？顔真っ赤じゃねぇか？」
あ、一応小声でだよ？一夏なら気付かないだろうが、箒が気にするだろうし。その結果がこれだよ……箒は顔真っ赤にして棒立ちだし、一夏はいつも通りの鈍感ぶりを見せてくれた。
「箒……でいいのか、チャイムがなったぞ？早く座れよ？」
「わ、私は恋など……え！？あ……すまんな、久遠……」
「俺のことも龍二でいい」
「そ、そうか。龍二……昼休み、話がある…それではな」
「え、あ……分かった」
……えっと？わたくし何か変なことしましたっけ？ってかキバット鞄に入れって！
「嫌だね～！」
「お前なぁ……あの鬼に叩かれてもいいのか？」
「う、そ、それは……」
「だったら早く入れ！織斑先生が来るまでにな！」
「うぃ～……」
ようやく入りやがった。疲れるねぇ、わざわざこんな事しねぇといけないのか……面倒だな。
……さて、と。授業が始まったんだが……あの、織斑君？何を頭抱えているのかな？

「織斑君？何かわからないところがありましたか？何でも質問してくださいね、私は先生ですから！」

おぉ、急に胸を張って！……む、胸が揺れている……！気にしてはいけないのは知っているのだが……

「あの、先生……」

「はい、何ですか♪」

ま　さ　か。

「ほとんど、いや……全部分かりませぇん……」

やりやがった。おいおい、織斑君よぉ、そりゃないだろう。って……俺は束さん手伝ってたからなぁ……

「えぇ？ぜ、全部ですか……今の所で分からないって人はいますか？」

・・・。

沈黙ってーのは嫌いだぁぁぁ！あの入学前の必読の参考書束さんに見せたら、分かりやすく説明してくれたし……ナニコレ？役得じゃないかよ。流石、神！このことも想定して！

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「え、ええっと……電話帳と間違えて、捨てまし」

バシッ！

痛そうですな、ほっほっほ。この後、結局再発行して、一週間で覚えるようになったようだ。ま、俺には関係無い。

一・夏・鈍・感（後書き）

こっちの方が書きやすいのは何ででしょうか。感想お待ちしております！

Sの罵倒／被害は俺だけ？

次の休み時間、一夏はさっさと箒に連れてかれちまったから……暇だ。誰かと話したくても周りには人が居ない。遠巻きから俺を見てやがる……俺は珍獣か！？

「ちょっと、よろしくて？」
「ちょっとよろしくないです」

んぁ？誰だっけ？……名前は……なんだっけ？セ……セ……そうだ！セシリア・モルモットだ！何でモルモットが俺に話しかける？…あ、一夏が居ないからか。

「まぁ！何ですの！その態度は！私に話しかけられるだけでも、光栄なのですからそれ相応の態度というものがあるのではないですか？」
「だって…お前の事知らないしよ」
「なっ！私を知らない？セシリア・オルコットを！イギリスの代表候補生にして、入試主席のこの私を？」
「へぇ…セシリア・オルコットって言うのか。さっきまでセシリア・モルモットだと思ってたよ」
「なっ！？それはあなたでしょう？なんてったって2人目の男子ＩＳ操縦者ですからね」

これって、キレテイイノカナ？実験生物（モルモット）って事だろうな。だけど、俺には束さん居たし…そういや、色々実験してたなぁ…

「えっと…まぁそうだな。束さんには色々協力してたし」
「それって、篠ノ乃博士のことですわね？」

「あぁ、そうだが？んで、その代表候補生さんが、何のようだ？」
「…本来なら私のような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ？その現実をもう少し理解していただける？」
「へぇ、そうなのか。ま、俺には関係ない…よな？」

また目つきが怖い。まぁ、箒よりはマシだが…ん？千冬さん？あの人は神の域を超えてるだろ。
いや、真面目に。

「関係ありますわ！なぜなら、あなたと私は同じクラスですもの！」
「え、あぁ…そうだったの。まったく気付かなかった…」
「まぁ！あなた、自己紹介をちゃんと聞いていなかったのですか！？」
「周りの視線のせいでそんな余裕なかった…」

これは、本当だ。周りが俺と一夏のことをずっと見るから、緊張しまくってたからな。あいつもそうだろう…まぁ、これで3人覚えれたな。一夏に箒に…オルコットだな。後は絡むまでわかんねぇな…のほほんさんもあだ名しか分からないからな。本名を聞かねばならん。

「そんなの理由になりませんわ！大体、あなた方ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

あ、ちょっとイラってした。まぁ、こんな小物に怒っても意味無いしな、我慢。

「すまないな、よく言われるんだよ。俺って馬鹿だしな…ＩＳに関しては別だろうけど」
「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ…泣いて頼まれたら教えてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
え、無視ですか？あの、俺って束さんという凄い教師が居たんですけど。…まぁ、いきなり抱きついてくるところ以外は完璧だしな、あの人。
「…え？ま、まぁ機会があればな…あ、そういや俺って入試受けてないような…」
「…はい？」
「だから、入試受けてないんだよ。前日まで束さんと一緒だったし」
そうなんだよ、俺の会見という名の黒歴史の後、日本政府から電話が来て急遽入学することになったんだ。だからそんなの受ける暇なかったんだぜ？それでも、神から専用機もらったのだってそのときだし。束さんが持ってたんだがな…そういうことにしたんだろ。たぶん。
「まぁ、関係ないだろう。どうせ負けてたって。俺のことだし…」
「そ、そうですわね、あなたなんかが勝てるわけありませんわ！」
うーん、勝てただろうけど、いちいち絡まれるのはメンドイ。っつーことで、負けたって事でいいや。
チャイムが鳴るまで、こいつは一夏を探してたな…俺の目の前で。邪魔すぎるだろ、淑女さんよぉ。さすがに女尊男卑のこの世でもそりゃぁないんじゃないですかい？

Sの罵倒／被害は俺だけ？（後書き）

感想お待ちしています。

篠・ノ・之・箒（前書き）

タイトルはおふざけです……（笑）

篠・ノ・之・箒

「あの～、箒さん？用事って何かな？」
「そ、そのだな…何故、私が一夏の事が好きだと思ったのだ…？」
「見たら分かるって…」

今は昼休み。さっき言われたとおり箒に連れられて屋上に来たんだが…腹減ったなぁ、これだけのためにここまで連れてこられたの？俺…辛いよ？

「……」
「話ってこれだけ？まぁ、任せろ。応援はしてやる」
「へ！？あ、あぁ…すまないな」
「いいって、束さんにも言われてるし…まぁ、それは理由の一つで。大きな理由は、俺なんかより周りの皆が幸せになれるようにって言う俺のモットーがあるからだ！」
「…は、はは…」
「わ、笑われた！？」

やべ、声に出しちゃった…相手も目丸くしてるし…けどなぁ…転生前からの目標だからな。これ変えられないしぃ…ま、いいか。

「い、いや…すまんな。私のためにそこまでしてくれるとは…」
「いいっての、よし、話が済んだなら飯食いに行こうぜ！」
「え？あ、あぁ…」

ど、どうしましたかね？顔赤くして…あ！手つないじゃってるからか…けど、こうしないと早くいけないし…腹減ったぁぁぁぁぁ！！全力で走る！！

「全力で走っていくけどいい？答えは聞いてない！」
「せめて聞いてくれぇ！？」

Ｓｉｄｅ　篠ノ乃　箒

久遠　龍二、私の手を握って食堂に向かっている男の名前だ。この男は自分の事より他人に幸せになってほしいと言った。正直、私には理解が出来なかった。
それは、自分がそういう事を考えず、ただ一夏の事を追いかけていたからだと思う。だが、こいつの一言で気づかされた。
……他人の事も、しっかり見て行かなければ行かねばならないと言うことだ。
っというより早すぎはしないか？え、まだ全力じゃない！？止めてくれぇぇぇ！！

Ｓｉｄｅ　久遠　龍二

何か、箒が上の空になって何か考えている。まぁ、いいのだが……

「おい、着いたぞ？」
「あ、あぁ……」
「は？ど、どうした？……ってなるほどね……」
箒の目線を追っていくと……一夏が楽しそうに女子と食べているよ。あいつ、本当にダメだな……
「よし、箒。俺が何とかしてやる」

「べ、別に飯くらいは……」
「いいっての、任せろって！」

そう言うと一夏達に近づいていく。もちろん、手はつないだままだぞ？

「おい、隣いいか？」
「え？あぁ、龍二か。いいけどよ……あ、箒もか？」
「あったりまえだ、馬鹿。幼馴染み何だろ？話すことあるだろうが…」
「あぁ、そうだな……すまないけど、どいてくれない？」
「えぇ～？折角織斑君の隣になれたのに～？」
「すまん！お願い！」
「俺からも頼むよ、飯食う時間無くなってしまうからさぁ……」
「……」

箒さーん？すねないの。いやー……けど、すねてても可愛いな。取り合えず頭なでなで。

「なっ！？何をする！！」
「あ、すまん……可愛かったからつい……」
「わ、私がかわいい……！？」

あぁー、顔赤らめちゃって。こら、そこの子！やってほしそうな目で見るなぁぁぁ！！絶対やらねぇぞ！

「頭……撫でてくれたら代わってもいいよ？」
「りょーかい。ほらよ…」
「あ、ありがとう！はい、どうぞ！」
「ほら、箒空いたぞ？俺はいいから座れって」

「私が……可愛いか……フフフ……」
「おーい……箒さーん？」
「……はっ！あ、あぁ……すまないな……」
箒さん……俺に言われて喜ぶんかい。
「ん？龍二、お前はどうするんだ？」
「そ、そうだぞ！お前はどうするんだ！」
「んー、後で席探すよ。箒、何食いたいんだ？俺が取ってくるよ。その間にお前は一夏と話しとけ」
「そこまでしてもらうと逆に困る！……和風定食で……」
「りょーかいっと……」
ふんふん、色々メニューがあるんだな。うーん……今日はおでんでいいか！天堂屋みたいに具は３つだったらいい……わけないか。伊達さんが作ってたおでん旨そうだったなぁ……お、きたきた。
「ほれ、これだろ？」
「ん？あぁ、すまんな……」
「龍二……俺、もう飯食い終わったからここ座れよ？」
「いや、お前は箒と話せばいい。聞かれたくなければ俺はどっか行くぜ？箒さん？」
「……私のそばにいろ……」
「りょーかいっと……ってああ！？」
「「ど、どうした（のだ）！？」」
「キバット忘れた……」
仕方ないんだ！箒が二人きりがいいって言われたし……すぐにここに来たし……後で何か食わせよっと……

「あぁ、あいつか？」
「そ、まぁ気にすんな。お前らには関係ない」
「そうだな……」
「そうそう、んじゃ早く食うわ。それまでお前ら思い出話とかしときな？休み時間だけじゃ足りなかっただろ？」

……これでよし。俺はゆっくり飯が食える……ん、大根旨いな！二人も仲良さそうに話しているし……良かった、良かった。これでいいんだ。俺は一生独り身だろうなぁ、こんな感じじゃ。

「ふぅ……」
「どうした龍二？何かあったのか？」
「箒……ありがとよ。けど、心配すんな、俺は大丈夫だ。お前は自分の事に集中しな？」
「あ、あぁ……助かる」

ん～……なんで俺の事を気にするんだろ。まぁ、いいが……

「あ、食い終わった…お前ら、教室戻るぞ？」
「え？ま、まだ私が食い終わってないぞ！」
「そうか……んじゃ、俺は待っとくから、お前は先に帰っていいぞ、一夏」
「おぅ、分かった……遅れるなよ？」
「はは、分かってるって！」

……まあ、これで帰るあいつは駄目だろうな。箒さんがすっごく怒ってるし。

篠・ノ・之・箒（後書き）

感想お待ちしております。

涌き出る殺意（前書き）

タイトルは気にしないでください。

涌き出る殺意

「箒……今のはすまなかった」
「……別にいい。あいつはああいう奴だからな…」
凄い怒ってらっしゃる……確かに一夏が先に戻るのは悪いよな。俺が原因だけど……さて、どうすれば一夏が箒を好きになるんだろうか……

「龍二……おい龍二！」
「ふぇ？……あぁ、食い終わった？」
「そうだ！早く戻るぞ！」
おおっと、意外と時間経ってる…走って帰るか。箒が追い付けるかわからんが。

「箒、走るか……？」
「あぁ、当たり前だ！」
「うおっ！待てって！」
それより先に走っていきやがった。ん～、足速いな。まぁ、それはおいといて…
「食べた後すぐに走っちゃいけませーん！」
～～～
「あぁ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ギリギリ授業開始には間に合った…だけど、この授業で代表を決めるらしい。まぁ、俺はめんどいし…一夏がなればいいんだよ…うん。

「クラス代表者とは、対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まぁ、クラス長だと考えてもらっていい。自薦他薦は問わない。誰か居ないか？」

「はい、織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「俺もーそれがいいなぁ～」

「お、俺？…って龍二！お前も俺を！」

「すまないが、お前が適任だからな…」

「他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「じゃ、じゃあ、俺は龍二を推薦する！」

「なっ！？まぁ良いけどよ…」

おうおう、俺を選ぶなんて…なんてことしてくれるんだ！これじゃ、睡眠時間が削られる可能性があるだろうがぁぁぁぁ！？…まぁ、戦えるなら良いけどよ！

「納得いきませんわ！そのような選出は認められません！」

おぉ、モルモットが机叩いて立ち上がった。ついでに言うと、一夏も立ってる。…ん？俺？もちろん座ってるよ？授業中だからね！お前らそういうとこはちゃんとしろよ？

「男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

ほほう、言うじゃないですか。お前なんかにはちょうど良いんじゃ

ないか？一夏が代表になるなんてな。俺？やる気無いからどうせ負けるよ。だって…本気で勝ちに行こうとすると、ハイカブ使うもん！

「いいですか！？k」
「だーめ」
「なっ！？」
「おい、龍二…」
「いいんだよ、どうせお前も限界だったんだろ？」
「あ、あぁ…」

そろそろ授業始めて欲しいという視線が…数人から来てたので早く締めてほしいのだが。まぁ、俺は良いんだけどな？その…だな、先生が俺をガン見してくるんだよ。それから開放されたいんだ！何で俺は睨まれねぇと何ねぇんだぁぁぁぁ！！

「（面倒だから）オルコットさんがやればいいと思います。そもそも、彼女は学年主席だと自慢してたので、彼女が適任でしょう」
「久遠、面倒だと思ってないだろうな？」
「あ、当たり前ですよ！俺は早く授業したいの、分かる？オルコットさn」
「決闘ですわ！」
「…あ？」

決闘って…勝ったら何もしないでいいの？ねぇ、聞いてる？

「勝った方が、クラス代表ですわ！」
「「えぇー…？」」
「なっ！？受けるのですかどっちなのですか！？」

おぉ、一夏君と気があったではないか。よし、握手しとこ。うんう

ん、友情っていいなぁ。

「…しゃーない。それが手っ取り早いな」

「おう、いいぜ。俺も受けてやるよ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けるようなことをしたらわたくしの小間使い…いえ、奴隷にしますわよ？」

ど、奴隷？…あれですか、頭に性が付くやつですか。

「…まぁ、俺は勝ちたいんでな…とりあえず戦えりゃあいい…」

「真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない…ハンデはどれくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？あなたもハンデが欲しいなら今のうちですわよ？」

イラッ☆…いや、冗談抜きであのドヤ顔は許せん。今ここで力の差を見せ付けておくべきか…？

「いや、俺がどれくらいハンデを付けたらいいのかなーって」

「「「…え？」」」

「当たり前だろ？お前らが驚いてんのは、ＩＳが使える女と使えない男の力の差についてだろうが。俺らは少なくともお前らと同位置なの…分かるか？」

「「「…」」」

…なんで黙るかな？殺気とか出てたかな？…千冬さんは笑わないの！その笑い方は人を怖がらせる！

「ま、まぁだな。俺たちだってＩＳ使えるんだが…相手は代表候補

生だからな。一夏はどうだか知らんが唯一試験で教官倒したらしいしな…俺は殺ってないけど」

はぁ、疲れた！もう当分喋りたくない！

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は1週間後の月曜日。放課後、第3アリーナで行う。織斑とオルコット、それと久遠はそれぞれ準備しておくように。それでは授業を始める」

あっれ～？俺がついでみたいな感じになってませんかね？……まぁ、いい。今は授業に……集……ちゅ……Ｚｚｚ……

涌き出る殺意（後書き）

感想お待ちしております。

寮と地獄と束さんへの制裁

「……頭、痛い」

「それはお前が悪いではないか。あの人の前で堂々と寝るとは……」

あぁ、そういって頭撫でてくれるの嬉しいよ、箒さん？

……あのあと眠すぎて寝ようと思ったんだが……いやぁ、鬼神（ちふゆさん）が恐ろしくて、何度も殴られたよ。しかも常に同じ場所を……放課後の今はもう大丈夫だがなぁ。

「っていうか箒さん？部活はどうしたんだい？それと、撫でてくれるのは嬉しいんだけど、何で撫でてくれるのかな？」

「「「……」」」

「そ、そうだったな！ではな！」

くっそはえぇ……ん？一夏君？……俺の前の席で死んでますよ？　頭から煙出してね。一気に頭に詰め込み過ぎたんだろ。そして周り！やりたそうにこっちを見るな！……俺の頭は俺が認めたやつしか撫でさせんからなぁ！？

「あぁ、織斑君、久遠君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい、何ですか？」

「……」

山田先生が教室に入ってきた。あれ……放課後、だよな？そして、一夏、せめて返事はしようか。

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

「「はい？」」

おぉ、やっと起きたか。いや、起きてたのかもな……今となっちゃどうでもいいが。

「俺の部屋って決まって無いんじゃ？自宅通学だと聞いたんですけど……」

「俺も～」

「そうなんですけど、事情が事情がなので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです」

事情？……あぁ、俺たちって男でＩＳ使えるから、他国に捕らえられないようにここで保護という名の監視をするためか。

「なるほど……で、俺は一夏と同じ部屋ですか？」

「そ、そうですよ！女と同じ部屋とか安心して眠れませんよ？」

「そ、そのですね……一人が相部屋で、もう一人が一人部屋何ですよ……」

ん？……一人部屋がいいに決まってるではないか。はっはっは。

「「俺が一人部屋ですよね？」」

「ええっと……織斑君が、一人部屋なんですｙ」

「神は俺を見捨てたぁぁぁぁ！！」

「よし！」

何でだよ！？俺が一人部屋じゃないの！……一夏と箒の相部屋じゃないのか！？

な、ななな……

「……」

「く、久遠君？これが部屋の番号が書かれている紙と、部屋の鍵です」
「ま、俺もお前とが良かったんだが……これは仕方ないな」
ドヤ顔すんな！一夏の野郎……来週潰す！絶対に潰す！！
「…あ、そう言えば。一夏、お前荷物は？」
「そうそう。先生、荷物を家に取りに帰らないといけないんですけ……千冬姉？そのカバンは？」
「織斑先生だ。私が手配してやった。久遠は持ってきているだろう？」
「え？あぁ、そうですね」
今日、日本に帰って来たって……酷いな。前日からホテルでゆったりさせてくれるかと思いきや、飛行機の中って……嫌だわ。
「あ、ありがとうございます」
「まぁ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう」
「で、では！時間を見て部屋に行ってくださいね」
このあと夕食は何時からだとか、部屋のシャワールームしか使ってはいけないとか……色々注意を受け、今……寮に向かっている。俺に言わせちゃこんなの……地獄への道だろ。
「えっと……あ、俺ここだわ。後で飯食いに行こうぜ、龍二」
「お前は気楽で良いよなぁ……一人部屋なんだし。俺は見知らぬ人と相部屋になる可能性あるんだぜ？……まぁ、夕食は一緒に食うけどな。じゃあ、後で」

はぁ……ここか。入りたくねぇ……とりあえずノックだな。

「ノックしてもしも～し」

「……」

よし、反応……えぇ！？あぁ、飯食いに行ってるのか。そうだ、そうなんだ。そう言うことにしといてくれ…！

「ん、意外と綺麗だな……」

「誰かいるのか？」

はい、死亡フラグ来ましたな。俺、このフラグ壊せたら、怖いもの無くなると思うんだ……

「あぁ、同室になった者か。これから一年、よろしく頼むぞ」

「……」

声を出したら殺される！ちょっとでも長く……一秒でもいいから長く…！

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていてな。私は篠ノ乃――」

「は、はろー？」

……ここで何か言えた　俺って凄いと思うんだ。俺が目にしたのはシャワーを使用していた箒さんだ。白いバスタオルに包まれた身体……はい、堪能しました。もう満足です。

「り……りゅう……じ？」

「あ、あぁ……」

その慌てている表情もまた可愛いな……ってそう言うことじゃなく！

「見るなっ！」

「言われなくてもそうする！」

ベッドに飛び込み、布団で身体を覆う。これで大丈夫だろ。

「な、なぜ、お前が、ここにいる……？」

「えっとですね……その前に着替えましょうか？ちゃんと話をしたいんだが」

「わ、分かった！ぜ、絶対に……み、見るんじゃないぞ！」

……あれはフリか？見てくれってフリなのか？そうだとしても、わざわざ死にに行くなんてバカなことはしないさ。……このまま待機だな。

「い、いいぞ……」

「分かった……」

うんうん、剣道着も美しい……

「そ、それでだ！何故、お前がここにいる？」

「俺も……この部屋何ですよ……」

「な、なに！？」

「えぇ、昨日まではね？俺もアパート借りてそこから通学するって計画だったのよ。だけどな、今日になって急にですね……決まったんですよ」

「そ、そうなのか……」

う、うん！俺は正しい！俺の計画はこういう物だった！束さんは残念がってたが……ん？

「ど、どうしたのだ？」
「いや、心当たりが……」
「それは誰なのだ？」
「お前の姉さん……」

多分だが、そうだろう。あの人はそれをやりそうだからな……ISの設計図とか渡して。

「……それは、」
「……ちょっと待ってな。今電話する」
「わ、分かった…」

束さん……今度会ったら一発殴らねばな。

「……もしもし？」
『やっほ～♪みんなのアイドル束さんだよ♪……って切らないでぇ！』
「はぁ……まだ言ってるんですか、それ」
『あはは、そうなんだよ？りゅーくん♪』

……はぁ、この人と話すと疲れる。

「束さん、話があるんだけど……」
『ん？何かな～？この天才の束さんに何でも言ってごらん♪』
「……俺を相部屋にしたのって、束さん？」
『……あ、あはは～♪な、なんのことかな？べ、別に箒ちゃんと同じ部屋になんて……』

「誰が箒と一緒って言いましたかね？」

はぁ、やっぱりか。

『ぎくぎくぅ！！……ごめんね、りゅーくん。箒ちゃんを任かせられるの、りゅーくんしかいないから…』

「……一夏じゃ、駄目なんですか？」

『いやぁ、いっくんはまだ専用機持ってないからー♪君しかいないんだよ♪』

……さいですか。もういいや……どうにでもなれ……

「それだけですんで。じゃ」

『あ、うん♪何時でも電話してきてね♪』

――ブツッ。

「……だとさ」

「……ウチの姉がすまん」

束さん……絶対殴る！

「いや、俺こそ……俺なんかで良かったか？」

「……まぁ、一夏の方が良かったが……」

それ目の前で言われるとちょっとキツいな！まぁ、俺には……恋人なんかな……

寮と地獄と束さんへの制裁（後書き）

相変わらず、短いですが……

感想お待ちしてます。

一夏の脳みそブレイカー（前書き）

……タイトルとの違いが……！

一夏の脳みそブレイカー

「だるい、眠い、腹減った！」
「おいおい、まだ朝だぜ？」
「自業自得だ」

朝だよ……眠くて辛い。いや、異性と同じ部屋で寝るとか、俺が耐えられんわ。……あ、キバット……ま、いいや。どうせ水とか勝手に飲んでるだろ。

「はふぅ……しゃーねーやー、もう叩かれてもいっかー」
「諦めるのかよ……」
「私は知らんぞ？」

それよりもだな、箒さん……君は何で普通に寝れてるのかな！？

「そういや龍二、お前って専用機持ってるのか？」
「……いや、持ってないぞ？」
「何？……あぁ、そうだったな……」

何で俺が持ってないように見せかけているかと言うと……相手に情報を渡したくないからだ。箒もそれには賛成してくれた……ってのが1つで、もうひとつは……このままもう一機専用機貰えるんじゃね？って思ったから～。束さんと箒と……本当に少ししか知らないからな。束さんが千冬さんに言ってなかったらの話だが。

「というか、早く飯食おうぜ。回りの視線が……」
「そ、そうだな……俺たち、すごい見られてるよな……」
「……私には妬みの視線が多いのだが」

この学園にいる男生徒両方と親しくしてるんだからな。そりゃ、嫉妬するわ。

「ふぅ……なぁ一夏、ＩＳの勉強しないか？俺と二人で」
「それはありがたいな！……ところで、どこでするんだ？」
「俺の部屋。すなわち、箒にも後から参加してもらう、だよな？」
「あぁ、私が希望したのだ……その、だな、お前に勝ってほしいからな！」

そこは素直に一緒にいたいって言えばいいのに……箒のそういうところが好きなんだが……

「え、遠慮する！」
「……お前なぁ、どうせわからないとか言うんだろ？」
「な、何で分かったんだ！？」
「そんな事だろうと思った……」
「馬に蹴られて死ね！」

一夏、お前キバットにライフエナジー吸わすぞ？

「んじゃ……放課後、俺の部屋な。」
「分かった。んじゃ、教室行くか」
「俺は後で行くから、お前ら二人で行きな？」
「おう、じゃあ行こうぜ、箒！」
「あ、あぁ！……す、すまんな……」

仲良さそうなのになぁ、こう見てると。だけど、一夏が鈍感だから……なぁ。

〜〜〜

「――それでだな、ここはこうなって……」
「あぁ、なるほど！」
「ふむ、そういうことなのか……」

放課後、俺たちは俺と箒の部屋で勉強会を開いていた。……だが、途中参加の箒も知らない事があるらしく、講師は俺だけだ。……めんどくさ。あの人呼ぼう。

「ちょっと待ってろ、特別講師を呼ぶわ」
「誰なんだ？それ……ってテレビ？」
「違う、これはテレビ型の通信機だ…おい……龍二、まさか……」
「そのまさか♪……束さーん、見えてる聞こえてるー？」
『おー、りゅーくん♪おっけーだよー。あ、箒ちゃんといっくんも！何してるんだい？』

……束さんだ。開発者に聞くのが早いだろ、ってわけであとは頼んだ、束さん！

『まっかせなさい！この天才束さんがわかりやすく説明してあげるよ！』
「……相変わらずだな、束さんは」
「……姉さん……」

さてと、あいつらが教えてもらっている間に、メダルでも拭くか。一夏とモルモットをフルボッコするのはオーズじゃないよ？だけどね、綺麗じゃん♪だからいつも綺麗にしてるんだ。

「お前らしっかり教えてもらえよ？この人ならなんでも答えられる。

絶対にな」
『任せてー♪』
「あ、あぁ……龍二？それなんだ？」
「ん？来週あいつを潰すために使うＩＳ関係の道具」

そうだよ……結局もう一機貰えなかったよ！！ということでさ、手加減しないでいいならプトティラ無双でいいや……っと言うわけで、プテラのメダルを拭いています。おぉ～、きれいきれい！

一夏の脳みそブレイカー（後書き）

感想お待ちしてます。

龍二の暴走は止まらない

「…金髪殺す…」
「…オルコット、俺は知らないからな」
「二人まとめてかかってきなさい！」

クラス代表を決めるための試合が始まろうとしてるんだが…何でこうなった。…さっき何があったんだ…

〜〜〜

「…で、結局なんだったんだ？」
「何が？」
「あの勉強だ！ＩＳ使って練習してないじゃないか！」

ピットの中でクラス代表戦が始まるのを待っていたのだが…一夏君が不満を漏らしてきてる。だってなぁ、お前の専用機がまだ来ていないからな、練習しようがないんだよ。

「仕方ないだろう、お前のＩＳが来ていないのだからな」
「現在進行形だねー、束さんは何してるのかなー？」
「…練習機あっただろうがぁぁぁ！！」

一夏君が怒りました。まぁ、すぐ箒さんに殴られるというわけなんだが…まぁ、俺は止めるよ？箒が嫌われちゃうからね？

「な、何をする！」
「箒、お前って好かれたいか嫌われたいのか良くわからないことするよな？ここは我慢しろ…嫌われるぞ？」

「うっ…仕方ないな…」
「誰に嫌われるんだ？って痛っ！！」
…鈍感すぎるだろう。こいつは俺が殴る…全力でな。箒さんがそれをしたら駄目だろう。嫌われるのは俺だけで良いんだ。

「んで…あの、金髪野郎は何してるのかねぃ…」
「あれ、殴ったよな！？お前殴ったよな！？」
「確かに…暇じゃないのか？あそこにずっといるのは」
「あれ！？無視かな？無視するのかな！？」

金髪野郎がずっと上空に居るんだが…暇じゃないのかな？それとも、逃げたと勘違いされたくないからずっといるのかな？それと…なんで俺が先に行かせてくれないのかな？何、俺…あいつのＩＳ潰すと思われてんの？酷いわ…

「お、織斑君織斑君！」
「山田先生、落ち着いて下さい。はい、深呼吸」
「は、はいっ。す～～は～～、す～～は～～」
「そこで、止めてください」
「うっ……」

お前……後ろに鬼神（ちふゆさん）がいるのによくやるなぁ……

「……ぷはぁっ！ま、まだてすかぁ？」
「目上の人には敬意を払え、馬鹿者」

……何でだろう、一夏が叩かれた時にターミネーターのＢＧＭが流れた……あ、千冬さんだからか。

「お前もか？」
「い、いえ！……それで、山田先生。一夏に用があるんですか？」
「あっれぇぇ！？俺無視なの！？ねぇ！！」
「あ、そうなんです！織斑君の専用ＩＳが届きました！！」
やっとか……さて、モルモットを倒してこいよ？
「これがお前のＩＳみたいだぜ？一夏」
「え？あぁ、これが……」
「はい！織斑君の専用ＩＳ『白式』です！」
これって……たしか束さんの研究所の端にあったような……
埃が被ってた奴か。
「すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ」
「あれ……？」
さて、箒さんは……いない？どこに行ったんだろうか？
「背中を預けるように……あぁ、そうだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する。」
「……」
あれー？箒さん…？探しに行こうかな……
「織斑先生」
「どうした久遠？」
「俺の負けでいいんで、観客席に行っていいですか？」
「駄目だ。お前を推薦した奴の事を考えろ」

「……一夏なんですけど」
「……そうだったな……」

よし、勝った。さてと、行こうかｎ『待ちなさい！逃げるのですか！！』　……何で見えているんだ。

「だってさ……俺とやっても意味ないって……弱いもん」
『だからって逃げるのですか！極東の猿はそれほどバカですのね！良く分かりましたわ！』
「……あ？」

はい、あいつ殺す。絶対に殺す。

「織斑先生、バトルロイヤル形式にしてほしいです……そうすれば一回で済みますよね？」
「……そうだな。あいつはお前に任せる」

よし、これで……良くねぇぇぇ！！箒を探しに行けないじゃん！！……まぁ、いい。金髪を叩きのめせばいいんだからな。
「一夏、俺も出る」
「え？……お前、殺るのか？」
「当たり前だ。ただの金髪にあんな事言われて許せるかよ……」
「……ほどほどにな」
さてと、予定が狂ったけど……金髪の息の根を止めにいくか。

『おい龍二！キバで行くのか？』
「んー、初めはそれでいい。んじゃ、殺りますか」
『おう！ガブッ！』
「……変身、でいいのか？展開だよな……」

俺はまずＩＳを展開させ、キバットに俺の首筋を噛ませる。そしてキバットが腰に着けてあるベルトに装着されると、俺は仮面ライダーキバになるんだが……これは嫌だな。どういう状況かと言うと、俺のＩＳ、『オールドライバー』はそもそもが装甲が分厚い。その上にキバの鎧が装着されるから……凄い強そうなんだけど、遅そうに見えるんだ。実際速いが。

「さてと、行きますか……」

『キバって行くぜ！！』

「あぁ、龍二！」

一夏くんには悪いけど……君の出番無いかもね。

〜〜〜

あれ、結局俺のせいでこうなったのか！！まぁいい、全力だ！！

龍二の暴走は止まらない（後書き）

次回、戦闘開始！

感想お待ちしてます。

織斑一夏の暴走

「さっさと終わらせたいんだ、抵抗するなよ？」
「あら、それはハンデですかしら？」
「あのー……俺は……」
「つーか、お前がハンデほしいだろ？本当に手加減しないぞ？」
もういいや……成り行き上こうなったけど、どっちも潰せるならいいか。結局こうなる運命だったのか……
「私は代表候補生なのですよ？ハンデなんかいらないですわ！」
『龍二、あいつは射撃する気満々だぞ！』
「だとさ、一夏…行くぜ？」
「了解！」
そういうと俺と一夏は左右に分かれる。そして金髪は俺達がいた場所に《スターライトｍｋ？》の照準を合わせてたらしく、そのまま一発撃つと、一夏に掠ったみたいだ。ま、俺には関係ないわな。
「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」
「黙れ…そんなこともできないのか？」
「なっ…！」
金髪の目の前に移動して、とりあえず邪魔な《スターライトｍｋ？》を蹴り飛ばしておく。こうすりゃ相手はあのファンネルもどきしか使えなくなる…はずだ。
「さぁて、ここからが本番だな…」

「な、なめた事をしてくれますわね！」
「そりゃ、早く終わらせたいから…行くぜ？キバット！」
『おう！ガルルセイバー！』

ガルルフォームになった俺は、いきなり形が変わったことに動揺している金髪をガルルセイバーで斬る。慌てて避けようとしたが間に合わなかったようで、直撃っと…あれ、一夏は？

「どうせ俺なんか…えぇい、ままよ！」
「じゃーま…っと！」
「ぐっ！」

近接ブレード構えて突っ込んできました。ガルルセイバーで受け止めて、押し返すけどな。弱い弱い…その程度かよ？

「くっ…行きなさい！《ブルー・ティアーズ》！」
「ようやくきたか…キバット、動きを読んでくれ」
『任せろ！』

ようやく自立稼動の《ブルー・ティアーズ》を出してきやがった。遅いんだよ…全てを潰してやる…

「ったく…行くぜ？早く終わらせたいんだ…」
『そこだ、龍二！』
「おう！」

《ブルー・ティアーズ》は4機あるんだが、そのうち2機を斬り落とす。これぐらいのスピードとパターンじゃすぐ読めるっての…あいつ弱いな。代表候補生って言うからどんなもんだと楽しみにしてたが…興醒めだ、さっさと終わらせよっと。

「速い！？くっ…」
「チェックメイト」
「かかりましたわ！《ブルー・ティアーズ》は６機ありましてよ！」
「えー、何だってー」
…ちょっと棒読みだったかな？まぁ、いいや…来い、タツロット…！

「龍二！」
「もう終わりでしょうか？」
『テンションフォルティッシモ！！』
「ったく…遅いっての、タツロット！」
『すいません～♪』

ミサイルに衝突する前にタツロットを呼び出してエンペラーフォームに変身し、ザンバットソードでミサイルを通り際に斬る。こうすると、爆発したように見えるんだよな。まぁ、俺には関係ないが。

「なっ…！また形が変わった！？」
「これが本来の形だ…終わらせるぜ？」
『ウェイクアップ・フィーバー！！』

相手の懐に飛び込み、ザンバットソードで斬り、上空へ飛ばす。金髪が体勢を整える前に、蹴りの体勢に入り、そのまま相手に蹴りをかます。

「おらぁ！！」
『いい感じだ、龍二！』
「っ！まだ行けますわ！！」

「そうかい……だが、終わりだ」
俺は金髪の真横まで飛んでいき、ザンバットソードを相手の首元につきつける。
「チェックメイト……」
「ま、負けですわ……」
「そう、か……よし、ありがとな、戦ってくれて！」
俺は礼儀正しいの！！ちゃんと挨拶くらい出来るわ！！しっかり抱き抱えて……ってあれ！？いつの間にか抱き抱えている！？
「っ！……男の方でも、こういう方がいらっしゃるのですね……」
「ん？どうした～？」
「い、いえっ！こちらこそ、ありがとうございます……また、先日の件は申し訳ありませんでした」
ん、いい子！俺はこういう子好きだよ？割と本気で。一夏が鈍感だからな……箒は残念だが。
「一夏～？っておわっ！！」
「お前らのお陰でフィッティングが終わったよ……一次移行（ファースト・シフト）もな……」
あれ、怒ってらっしゃる？ま、待てよ！今は金髪を俺は抱き抱えているの！わかれよ！そりゃ空気だったのは分かるけどよ！
「ったく……オートバジン！オルコットを頼む」
「あ、あの……よろしければ、セシリアと呼んでくださいまし…」
「おう、じゃあセシリア！また後でな！」

「は、はい！！」

オートバジン（こいつも神が作ってくれたらしい）にセシリアを任せ、一夏の方を向く。

「すまないな、お前を無視して。だけど、これで本気で戦えるだろ？」

「あぁ、そうだな……うらぁぁ！！」

力任せ、か。こんなもん避ける必要もないな。ザンバットソードで一夏の？雪片弐型？を受け止め、相手の腹に蹴りを入れる。

「ぐぁっ！！」

「ったく……その程度か？だけど、流石千冬さんが使ってた剣だな。強い……」

『龍二！！』

「うおっと……何だよ、箒？」

朗報だ。俺が探そうとしてた箒さんが俺に通信で話しかけてきた。探す暇が省けたっていうか……

『その、だな……お前は一夏に勝てるのか？』

「当たり前だろ……俺は絶対に勝つ。俺のために、そして、お前のためにもな」

『なっ！……そ、そうか……絶対に勝つのだぞ！』

「了解っと……」

「話は終わったか？」

「おう、いくぜ！」

一夏と距離を取り、お互いに瞬時加速（イグニッション・ブースト）をして近づき、すれ違い様に

一閃する。だがな、俺の方が一歩上手だ。

『試合終了。勝者――久遠　龍二』

「当然の結果だ」

「くそっ！」

すれ違い様、俺はあいつの剣にセルメダル数枚を叩きつけ軌道をずらしたんだ。ずるい？そんなこと知らない！！

「さってと……帰って寝るか♪」

織斑一夏の暴走（後書き）

相変わらず戦闘描写……ｏｒｚ

Rはクラス代表／弄られる一夏

「――――では、一年一組代表は久遠龍二くんに決定です！」
「…そうだった！」
「忘れてたのかよ…」

セシリアとの試合の翌日のＳＨＲで俺がクラス代表だと言うことを聞くまでその事はすっかり忘れていた。いや、忘れたかったのかもな。これってあの…あれだ…めんどくさいなぁ。

「まぁ、仕方ないかぁ…」
「そういう事だ、クラス代表という名に恥じないよう努力しろ」
「はい…」

ちふ…織村先生の目つきが恐ろしすぎるので、仕方なく承諾した。まぁ、勝ったのは俺だからな…仕方ないっちゃ仕方ないが…

〜〜〜

「…で、何でこうなったの？」
「確かに…」
「龍二さん！どうか私を鍛えてください！」

その日の昼休み、俺は一夏と並んでセシリアから逃げていた。なんだか俺が強いのは鍛えてるからと勘違いしてるが…残念だな、これは神から貰った力ですから。という訳で一夏を連れて逃げている。一夏も箒から逃げていたので、一緒に行くことにした…あいつの気持ちわかってやれよな？

「いい加減諦めなよ…」
「本当だ…龍二に鍛えてもらうのは俺だのにな…」
「あぁ…ん？そうだっけ？」
「そ、そうだって！お前が言ったんだろ！！」
…覚えてねぇ。まぁ、力任せに振り回してたら《雪片弐型》の無駄遣い、宝の持ち腐れだからな。俺が鍛えてやろう。クラス代表になってしまった鬱憤を晴らすとき…

「いいぞ？ただし、少しだけだけどな？」
「おぉ！ありがとうな！」
「私もお願いします～！！」

～～～

「これよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、久遠。試しに飛んで見せろ」

今は一夏との特訓を初めて数日経った日のグラウンドでの授業中。織斑先生の命令に従い、俺とセシリアはＩＳを展開する。一夏は…相変わらず展開が遅いな。

「どうした織斑、早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで１秒とかからないぞ」

…じゃあ、俺って熟練してるのか。初めて知った…あんまり展開してないのにな…めんどくさいから神様のおかげってことで！…お、ようやく展開できたみたいだな。

「よし、飛ｂ『タカ！クジャク！コンドル！タ～ジャ～ドル～♪』
…」
「あ、やべ」
「久遠…今度は何だ？」

ギリギリまで変身してなかったから織斑先生の話と被ってしまった
…恐ろしや…その分山田先生って凄いよな。最後までチョコたっぷ
…じゃなくて！

「ＩＳの仕様です…これはどうしようもありません」
「そうか…他にもあるんだろう？」
「えぇ…まぁ。飛んでいいですか？」
「あぁ、飛べ」

そう言われると先に飛んでいたセシリアと一夏のところへ向かう。
それにしても速いな…一瞬で追いついたぜ…恐ろしいな、オーズも。
だからこそ負担があるんだろうな。

「は、速いな…」
「そうですわね…」
「確かにな…俺もびっくりだよ？」
「…何でお前は知らないんだよ！」
「そうですわ！自分のＩＳの性能ぐらい把握しているのが常識です
わよ！！」

…怒られちった。べ、別に怒られてもどうも思わないんだからね！！

「…流石に飛び方は安定してるな。俺が教えただけはある」
「あぁ…あの鬼のような特訓のおかげでな…」

「な、何があったんですの！？」

聞いちゃう？一夏が凄い言いたくなさそうな顔してるから言わないけど…まぁ、簡単に言うと下から俺が攻撃してそれから逃げるように飛ぶという特訓だ。それをセシリアに話したら、笑顔が引きつったんだが…何でだろうな？普通だと思うんだが。

「織斑、オルコット、久遠、急降下と完全停止をやってみせろ。目標は１０センチ。久遠は５センチだ」

「ひでぇ…まぁ、レディーファーストだ。セシリア、先に行きな？」

「あ、ありがとうございます…それではお先に！」

流石代表候補生だな…目視では良く分からなかったが、たぶんぴったし目標どおりだろうな。さてと、次は俺だ。

「よし一夏、先に見本を見せてやる。後でちゃんとやれなかったら説教！」

「え！？ちょっと待てって！」

『スキャナニングチャージ！！』

無視っと。何でスキャニングチャージにしたかって？…格好いいからだよ。コンドルレッグを展開させ、そのまま地上に降下する。地上にぶつかる寸前に空中で宙返りをして、コンドルレッグを元に戻し地上に降り立つ。

「…っと、これでいいですか？」

「言うことはないだけだ。あんな危険なことはお前しかできないだろう。他の者は真似するな」

うーん、褒めることできないのかな？まぁ、いいけど。ってか、疲

れるから変身解除したら…駄目ですよねー。

――――ドゴォォォン！！

…馬鹿ですか？俺の完璧な着陸を見てもこうなるんですか？そうですか、馬鹿なんですね…なるほど。クレーターを作れる馬鹿なんですね。分かります。

「大丈夫か、一夏！」

「あぁ、なんとかな」

「おぉ、馬鹿が喋ったぞ、セシリア？」

「そうですわね、驚きですわ…クレーターを作るほどのお方が喋れるとは」

「お前らぁ！！」

…セシリアが乗ってきたことにも驚いたし、一夏の怒り具合にも驚いている。まぁ、面白いけど。やっぱやめられないわ、一夏いじり。

「そうだぞ、龍二、オルコット」

「箒…！」

「こいつは大馬鹿者だ」

「お前もかぁ！！」

箒さんも恐ろしい…上げて落とすという…高度なテクニックを持ってるとは。

「お前ら、そこまでにしておけ。織斑が大馬鹿者だということは前から知っている」

「千冬姉まで…」

「織斑先生だ」

「痛ぇ！」

…学習しろよ。

Rはクラス代表／弄られる一夏（後書き）

今日中にもう一個出せるかもしれません…

再会とパーティと寝不足

「それでは、武装を展開しろ。織斑、オルコット、久遠」
「は、はぁ…」
「はい」
「あ、はい…」

正直今の俺ってタジャスピナーだけなんだよなー、そう思いながら展開する俺。胸のオーランクサークルが光り、左腕にタジャスピナーが装着される。
横を見るとセシリアも武装を展開し終わってるみたいだ。

「織斑、遅いぞ。０．５秒で出せるようになれ。オルコット、さすが代表候補生だな。ただし、そのポーズはやめろ。横に向かって銃心を展開させて誰を撃つつもりだ。正面に展開出来るようにしろ」
「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な―」
「直せ、いいな」
「……はい……」

セシリアが口で負けるとは……さすが織斑先生、格が違うぜ！

「久遠、お前は……本当にそれだけか？」
「この状態なら、これだけです」
「そうか……オルコット、近接用の武装を展開しろ」

あっれー？俺に関する感想は？酷くない？俺ってそんなに普通なの……あ、普通でいいのか。まぁ、異常なんだけどな……いい意味で！！

このあとセシリアが近接用の武装を展開するのに時間がかかって、初心者向けの展開法を使って……自分は近接の間合いに入らさせません！って言ってたが、俺が入ってたことを織斑先生が言って、セシリアに個人間秘匿通信（プライベート・チャネル）で怒られた俺であった。

〜〜〜

今日は俺のクラス代表就任記念パーティがあるらしく、それが始まるまで俺は散歩をしていた。今日は一夏との訓練はセシリアに任せてある。たまには休憩したいよ……

「本校舎一階総合事務受付……って、どこにあんのよ」

……お？この声は確か……あいつか。まぁ、すぐには話し掛けないでおこう。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさぁ」
「おやおや、可愛い猫が迷っているみたいだな。どうした？」
「えっ！？もしかして……龍！」
「うおっ、いきなり抱きつくってなんだよ……鈴」

そう、迷っていた奴は、鈴。鳳鈴音（ファン・リンイン）である。俺とこいつとは色々と関係があるんだが……まぁ、これは今度話すとしよう。ちなみにこいつは俺のことが好きらしい。

「だって、寂しかったし……」
「俺もだぜ、鈴。っというか、一夏に会うか？」
「あいつなんか良いわ！龍がいれば……」
「はいはい。んで、受付に用があるんだろ？」
「あ、そうそう！連れてって？」

相変わらず図々しい奴。だが、そういうところもいいな。ってな訳で、俺と鈴は何故か手を繋ぎながら受付へと向かった。

「そういや、お前って何でまたこんな時期に来たんだ？」
「それは……私がつい最近までここに来るのを断ってたからよ」
「何でまた？」
「龍がいないから……」
「そうですかい……あ、了解。よくわかった。どうせこの前の会見で分かったんだろ？俺が行くって。それで行きたくなって政府に話をしたけど、入学式に間に合わなかったんだろ？」
「さすが、龍！全部正解よ！」

誉められたくねー……だけど、女にそういわれると嬉しいな。こんな可愛い女だとさらに。

「あ、ここだ。玄関入ってすぐのところな」
「ん、ありがと……ねぇ、龍って何組？」
「一組。一夏と一緒だ」
「あいつと一緒なのね……」

そう楽しげに話し合えた俺はゆっくりとパーティ会場である寮の食堂へ向かっていった。

〜〜〜

「というわけでっ！久遠くんのクラス代表決定おめでとう！」
「おめでと〜！」

……これまた豪勢な。よくもまぁ、こんなパーティ開くよな、女

子の行動力がよくわからん。

「いやー、これでクラス対抗戦も熱くなるねぇ」
「うんうん！」
「ラッキーだったよね、同じクラスになれて」
「そうだね！」

……頷いた奴。お前ら俺のクラスじゃねぇよな！？何でいるんだよ！！

「人気者だな、久遠」
「ありゃ？箒、一夏といればいいのに……何でこっちに来た？」
「きっ、来てはいけないのか！？」
「いや、いいけど。お前の好きな人が一人寂しそうにしてるからさ……」
「そ、そうだな……」

箒さんが近寄って来たのでさりげなく腰に手を回し、こちらに寄せる。驚いているが、反抗はしてこない。何でだ？

「……私はどうしたらよいのかわからん……」
「おーい、箒ー？」
「な、何だ！？」
「うおっ……」
「あ、すまん……」
「いや、いいけどさ……お前って本当に不幸だな。あんな奴を好きになってしまって。まあ、がんばれよ！俺は応援してるぞ？」
「そ、そうか……助かる……」

そういうとそそくさと離れていく箒。顔を赤くしてるのも可愛いな

あ……

「セシリア、どうした？」

「あ、龍二さん。いえ……一夏さんがあまりにも飲み込みが早いので、驚いていただけです」

「あぁ、今日の訓練か……」

ったく、あいつは元々は強いんだからな……セシリアが驚く訳だ。

「はいは～い、新聞部で～す。話題の新入生、織斑一夏君と久遠龍二君に特別インタビューをしに来ましたー！」

お、インタビューか。めんどくさ、一夏だけで良くないか？

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）。よろしくね。新聞部部長やってまーす。はいこれ名刺」

「ありがとうございます」

画数多いな。俺がこの名前だったら挫折してるわ。

「ではではずばり、久遠君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

「最初に言っておく！俺はか～な～り、強い！」

「おおっ、いいね～！」

……これでいいのか？俺的にはいいんだが。そして一夏は捏造される運命にある、と。

「さてさて、専用機持ちの三人で写真撮ろっかー！」

「……」

「そんな嫌そうな顔しないでさ！」

もちろん嫌そうな顔をしたのは俺だ。めんどくさいったらありゃしない。写真なんかあっても無駄だ。

「セシリアちゃんは織斑君と手を繋いで？……そうそう。それで久遠君は真ん中に座って？……うん、バッチリだよ！」

……箒さんがすねとる。怖いわ……黛先輩の命保証することは出来ない……

「それじゃあ、撮るよー。３５×５１÷２４は？」

「７４．３７５」

「正解！」

パシャっとシャッター音がした後、周りを見ると案の定一組全員が周りにいた。

「クロックアップか……？」

「何だそれ？」

「いや、気にするな……」

この宴は１０時まで続いた。くそっ……眠いぜ……

再会とパーティと寝不足（後書き）

タイトルの寝不足はパーティの次の日の事です。

苦労のI／不憫な主人公

「もうすぐクラス対抗戦だね！」
「そうだ、２組のクラス代表が変更になったって知ってる？」
…なぜ俺の机の近くで話す。せめて俺から離れてくれ…寝不足で仕方ないんだ…
「あぁ…何とかって転校生に代わったのよね」
「転校生？今の時期に？」
「…」
…あきらか鈴だろ。昨日あったし…ってあいつ二組か、残念だな…色々話したかったし…
「うん、中国の代表候補生なんだって」
「ふん、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」
「お前なんかどうでもいいだろ…」
だって弱いしな、と言おうとしたが、その前に首根っこをつかまれた。きゃー、助けてー。
「何ですって！？わたくしが弱いなんて…ありえませんわ！」
「実際俺に負けてるし？」
「あはは…けど、今のところ専用機を持ってるのって１組と４組だけだから余裕だよ」
「その情報古いよ！２組も専用機持ちがクラス代表になったの！…

って、龍に何してんのよ！！」
「ヘルプミー…」
ようやく登場か…遅いっての。うおぅ、セシリアを蹴り飛ばしたか。それで…俺の前に立つ。ありがたいけど…なんでしゃがんでるの？
「助かった…ありがとよ、鈴」
「お前…鈴か？」
「別にいいわよ？あんたは困ってるときいつも助けてくれたし」
「あぁ、そうだったっけ？」
「あれ、鈴さえも無視するのか！？なぁ、聞いてくれない！？」
…そんなこともあったなぁ…いや、正確に言えばあったらしいなんだが。このことはキバットに聞いたから、あんまり詳しく知らないんだよな。後で、映像探すか。
「それよりも…お前って専用機持ってるのか？」
「そうよ！…その、助けてくれたお礼とかしなさいよ…」
「あぁ、だからしゃがんでるのか。おまえは本当に頭撫でられるの好きだよな？」
「ん…べ、別にいいじゃない！」
「あのー…俺はー…」
「あ、ＳＨＲ始まるぞ。早く戻れ」
「あ、うん…」
寂しそうな表情を浮かべて教室を出て行った鈴。っていうと、変な感じだから、１組の教室から出て行った鈴。そして、鈴と入れ違いに織斑先生が入ってきて、ＳＨＲが始まった。はぁ…また長い一日の始まりだ…

〜〜〜

「まぁ、昨日会ってるから…感動の再開ってわけでもないがな？」
「そうね…まぁ、いいわ！」

昼休み、俺は鈴と一緒に昼飯を食べていた。それにしても一夏がすねてるな。まぁ、今まで無視され続けていたし、鈴にも無視されてたから……な。

「それで……元気にしてたか？」
「もちろんよ！」
「お、それなら良かった。心配だったからな？」
「そ、そう……ありがと……」

照れてるな……見たらすぐわかる。おっとそんなこと考えてるとセシリアと箒がやってきたぞ？

「龍二、そろそろどういう関係か教えてほしいのだが」
「そうですわ！龍二さん、まさかこの方と付き合ってらっしゃるのですか！？」

……えっと。セシリアが聞いてくるのは分かる……と思うんだが、箒さんの理由が思い当たらない。何でだ？あいつが一夏を諦める事はないと思うんだが……

「べ、べべ……別に付き合ってる訳じゃ……」
「まぁ、そうだな……俺としては、こいつが恋人でも構わないんだが……」

……おふざけが過ぎたかな？鈴が固まってるし、セシリアは地団

駄踏んでる。箒は……どこからか知らないが木刀を構えている。

「……え、それって……こ、告白なの……？」
「くぅぅ……！わたくしはダメなのでしょうか……！」
「……お前って奴は！」
「ちょ、ちょっと落ち着けって！」

一夏君、登場。後はこいつに任せるか。

「あ、そうだ。一夏が言えって言ったんだな？」
「え？は？」
「……勘違いさせてぇぇぇ！！」
「許しませんわ！！」
「そうか、そうか……そうであったか……よし、一夏。ここで成敗してやる！」
「ちょっ！！龍二！！待てぇぇぇぇ！！」

さてと、ゆっくり歩いて帰るか。

苦労のＩ／不憫な主人公（後書き）

今回はいつもより短いです。

目覚める箒

「お前のせいでぇ…お前のせいでぇ…」
「…眠いな…早く寮に帰るか」
「また無視するのか！？なぁ、ちょっとくらい話を聞いてくれないのか！？」

放課後、一夏が抗議しにきたが…眠すぎてそれどころじゃない。というわけで早く戻るか。面倒だし…
もし着いてきたら、捕まえてやるだけだし…

〜〜〜

「それで、案の定着いてきたというわけか、龍二？」
「あぁ、だからストーカーとして千冬さんの所へ連れて行こうと思うんだが、どうする、箒？」
「勘違いだ！だからそれだけはやめてくれ！！！」

…結局着いてきました。というわけで、一夏の事が好きな箒さんが帰ってくるまで一夏を縛って…帰ってきたんだが。

「よし、そうしよう」
「おぉい！？」
「いいのか、箒？ここで一夏を助けたら少しは好きになってくれるかもよ？」
「別に構わん！さぁ、行くぞ！」
「俺の味方は誰もいないのか！？」

…見捨てるらしい。俺的には駄目だと言っても連れて行こうとして

たが…意外だったな。さてと、足を掴んで、引きずって行くか！！

「痛い痛い！！」
「ふぅ…寮長室ってどこ？」
「たしかあっちだ」
「何してんのよ、龍？」
「ストーカーを鬼の生贄にするんだ。お前も行くか？」
「もちろんよ！」

鈴が仲間になった！…って言ってもだな、一夏はやっぱりたすけてもろうとするんだな。

「鈴！助けてくれよ！」
「それで？私はどうしたらいいわけ？」
「…いるだけでいいさ。おまえらに力仕事はさせられないからな」
「おい、龍二！そんな事言うならな！せめて縄だけでも解いてくれよ！なぁ、無視か！？無視するんだよな！？」
「近所迷惑」
「ごふっ！！」
「さすが龍ね！」
「む…」

ギャーギャーわめく変態に制裁を与えたら、鈴が俺の腕に抱きついてきた。まーた、誘惑しようとして…頑張りだけは褒めてあげるよ。そして箒！何故ムスッとする！？お前は一夏が…ん？

「疑問に思う事がある…箒？」
「な、何だ！？」
「お前って…これが好きなんだろ？」

一夏を顎でさす俺。微笑む鈴。お前は恋敵がいないと知って喜んでるんだろ！？…あれ、箒さん？何で固まってるのかな？それと顔赤くして…

「どうした、まさかとは思うが…」
「…多分、そのまさかだ…」
「…すなわち、私の敵ね！」
「鈴は黙っとけ」
「はぅ…」

まさか…こいつもそうだったのか…いや、つい最近なったのか。それにしても…めんどくさくなってきたな。確かに、最近それっぽい行動が多かったが…

「まぁ、その話は後ですると して…」
「あ、あぁ…そうだな」
「…私も入れてくれｒ「お前が入ると話がこんがらがるから駄目」むぅ…」
「…ここだな」

ようやく鬼の住処（寮長室）に着いたか。さっさと一夏を引き渡して帰ろう…話がめんどくさい…

「織斑先生？ちょっと俺の事を追い掛け回す変態がいるので連れてきました～」
「ん？…ほんとうにこいつがお前の事を？」

「はい、そうですけど…」
「そうか、なら後は任せろ」
「ありがとうございまーす」

よし、これで俺の仕事は終わったな…いや、まだだった。箒との話し合いがあった。まぁ、頑張って一夏のことをもう一度好きにさせないとな！

「よし、帰るか…箒」
「そ、そうだな…」
「え！？もしかしてあんたたち…同じ部屋なの！？」
「…そうです…」
「…へぇ、いい事聞いちゃった♪じゃあ、またね～！」
「嫌な予感しかしないんだが…」
「確かに…」

はぁ…めんどくせぇ。どうせ夜こっそり来ようとでも思ってるんだろうな。まぁ、それくらいならいいかな。そもそもあいつ、俺の部屋知らないから大丈夫！さてと、ゆっくり話でもするか…

～～～

「それで…おまえはどうしたいんだ？」
「私は…お前が好きだ！」
「はぁ…それが本心なのか？」
「え…そうだと言ってるだろう！」
「一夏はどうなんだよ？」

…まったくめんどくさい。鈴でさえも堂々とそんなこと言わないぞ？筞…嬉しいけどよ、一夏はどうするんだよ？

「あいつは…幼馴染だ！」

「おいおい…お前はあいつの事が好きなんだろう？そう自分でも言って

たじゃないか…」

「そうだが…あいつは私のことを幼馴染としか見てくれないのだ」

「あぁ、もう！めんどくさいなぁ！俺は早く寝たいの！俺の事好きだってのは分かった！だけどな、他にも俺の事を好きって言ってくれる奴もいる！だから、お前も頑張れ！本当に、俺の事が好きならな！」

「？？？分かった、だが？？？きょ、今日だけは？？？？一緒に寝させてくれないか？」

「いつも一緒に寝てるだろ？」

？？？まさか。

「そうじゃない！？？？同じベッドでだな？？？？？？」

「？？？好きにしろ？？？お前がしたい通りにすればいい？？？？？？本当のところ言うと、ずっと待ってたんだがな！」

言っちゃったよ！どうすればいいの！？？？？？？？？結局一緒のベッドで寝ました。変な事はしてないからな！？

目覚める箒（後書き）

最近焦って書くので元々悪い質が更に悪くなってきています？？？？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2188z/

IS(インフィニット・ストラトス)　～何というチート人生～

2011年12月17日22時33分発行